四天王寺大学紀要　第71号（2023年3月）

今西祐行『一つの花』における「一つだけ」の持つ意味について

On the meaning of “only one” in Sukeyuki Imanishi’s “One Flower”

浜　田　幸　子
Yukiko HAMADA

はじめに

今西祐行の『一つの花』は反戦平和をテーマとした児童文学作品で、小学校の国語教科書に長らく取り上げられ、現在も光村図書、東京書籍他の4年生の教科書に掲載されている。

『今西祐行全集　第四巻』[1)] のあとがきには、作者である今西祐行の、この巻に掲載された『一つの花』についての、次のような解説がある。

> 「一つの花」は、はやくから小学校の国語教科書にのせられてきましたので、私の作品の中ではおそらく一番ひろく読まれている作品かと思います。最初にこの作品が発表されたのは、昭和二十八年、「教育技術」という、奇しくも学校の先生のための雑誌でした。書いたのはその一年くらい前のことだったと思います[2)]。

これによると、「一つの花」が発表されたのは昭和28（1953）年である。終戦後十年に満たない時期に書かれている。戦時中の父母子三人の日常と終戦十年後の母子の日常の一コマを描くことによって戦争の悲惨さと平和の大切さを訴えた短編の名作である。

この作品は長らく教科書に掲載され続けてきたこともあって、教科書教材としての教材論的作品研究や、教材分析、授業の実践報告は非常に多い。また、本作品を文学作品として研究した論考においても、作品の教材としての可能性を問う内容となっており、教材論的な観点を内に含んだものと言える[3)]。本稿も国語教育の立場からの研究である。

私は、教材研究とはその作品をどう読み取るかという深い作品研究に基づいてなさなければならず、その作品研究も本文に忠実に分析的に行わなければならないと考えている。本稿は、『一つの花』の作品研究として、作品中で重要な役割を担っている「一つだけ」という言葉に着目し、その意味と多様な読みの可能性に限定して分析と考察を試みたものである。

関口安義氏は『一つの花　評伝今西祐行』[4)] で、今西祐行の作品について、次のように書いている。

> 無駄のない的確な文章は、省略の手法を得て定着する。そのことはテクストに空白（ブランク）を残すことにつながる。それを彼は自作への読者の参与の道だとして肯定するのであった。こ

こに多様な〈読み〉が期待できるテクストが誕生する[5)]。

そして、『一つの花』においては、戦争に出かける父親を幼い子と母親が見送る場面に出てくる「バンザーイ」という言葉の解釈の多様性とそれを全文脈のなかで考えることの重要性が述べられている。

関口安義氏の言う「テクストに空白(ブランク)を残すこと」で生まれる「読者の参与」による「多様な〈読み〉」は、作品中の様々な箇所で試みることができる。『一つの花』の作品中には「一つだけ」という言葉が複数回出てくるが、この言葉が使用されている箇所についても同様である。「一つ」とはもちろん、数である一つを表しているが、これに副助詞「だけ」が付けられ「一つだけ」となることによって多様な意味を持つようになる。さらに、この多様な意味を持つ「一つだけ」が異なる場面あるいは文脈に置かれることによって、それぞれに異なる多様な意味を読み取ることができるようになる。それは関口安義氏の言う「多様な〈読み〉」に他ならない。「一つだけ」という言葉が、どの場面、文脈で、何に対してどのような意味で使用され、どのように読み取れるのかを見ていくことによって、作品『一つの花』の持つ反戦平和という大きなテーマに、さらに付加されて形作られる主題に迫ってみたい。

1 『一つの花』のあらすじ

『一つの花』は次のような話である。

（1）戦争がはげしかったころ、まだ幼いゆみ子と両親が暮らしていた。食べるものは乏しく、ゆみ子はごはんでもおやつでも、いくらでも欲しがるので、母親はいつも「一つだけよ」と言って自分の分から与えていた。そのため、母親の口癖の「一つだけ…」をゆみ子は最初に覚えたのだった。

（2）父親も母親も、そんなゆみ子が不憫でならなかった。

（3）あまり丈夫でない父親も戦争に行かなければならなくなった。その日、ゆみ子も母親に負ぶわれて、遠い汽車の駅まで、父親の見送りに行ったが、その道々、「一つだけ。一つだけ。」と言って、父親のために作ったおにぎりを全部食べてしまった。いよいよ汽車が入ってくる時間になって、ゆみ子はまた「一つだけ。」といって、とうとう泣き出してしまった。おにぎりがもうないということを知った父親は、プラットホームのはしのごみ捨て場のような所に忘れたように咲いていたコスモスの花を見つけ、その花を一輪持ってきて「一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよ――。」といってゆみ子にわたした。ゆみ子はキャッキャッとあしをばたつかせて喜んだ。父親は、それを見てにっこりわらうと、何も言わずに、汽車に乗って行った。

（4）それから、十年後、ゆみ子の住んでいるとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱいに包まれている。日曜日のお昼を作るために「お肉とお魚とどっちがいいの。」と、母親に聞くゆみ子の声が聞こえ、買い物かごをさげたゆみ子がスキップしながら出てきて、町の方へ行った。

このように『一つの花』は大きく四つの場面からできており、描かれているのは、（１）～（３）は戦争末期の頃であり、（４）はそれから十年後で、終戦後である。（４）の初めに「ゆみ子は、お父さんの顔を覚えていません。自分にお父さんがあったことも、あるいは知らないのかもしれません。」と書かれているように、（３）で、戦争に行った父親は戦死して、もう帰ってこなかったのであろう。父親が出征した時にコスモスの花が咲いていたことと、（４）でも、ゆみ子の家がコスモスの花で包まれていたことから考えると、（１）～（３）は昭和19（1944）年の秋で、（４）はそれから十年後の昭和29（1954）年の秋の設定としてよいだろう。

戦時中は、食べるものがわずかで、手に入るものだけでは足りない状態であったものが、十年後（戦後）には、何を食べるか（お肉かお魚か）、選んで買うことが出来るようになった。それほど、物が豊かになったのである。明日の命も定かでなく、物資が欠乏し食べるものもままならい戦時中と、その十年後の何を食べるか選ぶことができるほどに物資もいきわたり、父はなくとも働きながら母子が暮らす平和な様子を対比させることによって、「反戦平和」を訴えている。

２　「一つだけ」を取り上げた先行研究

作品『一つの花』の中の「一つだけ」という言葉を取り上げた先行研究には、以下の二つの論考がある。

(a)　北村好史・生野金三「教材「一つの花」の研究（その1）――実践的指導力の体得を志向して――」[6)]

この論考では、「言語的視点から」として「一つだけ」を取り上げ、次のように書かれている。

> この表現も、ゆみ子、母、父それぞれにこめる思いは異なっている。ゆみ子にとっては、「少しだけれど、何でも欲しいものが手に入る魔法の言葉（ア）」であり、「両親の愛情の証（イ）」でもある。母にとっては、もっともっと与えたいけれど叶わない、「もうこれだけという限定を表す言葉。（ウ）」であり、「母としての痛み」の発露（エ）でもある。父にとっては、「どうすることもできない、時代を背負ったやりきれない言葉（オ）」であり、出征の場面では、「世界に二つとない、父の思いをこめた言葉（カ）」でもある。　（下線と記号は筆者による。以下同様。）

そのあとに、以下のようにも書かれている。

> 「一つだけ」は、限りなく無に近い有を示す、選択が叶わない、極限を示す言葉である（キ）こともおさえたい。

(b)　坂本喜代子「小さな静寂はそのままにつながりを結ぶ物語」[7)]

この論考では、「一つだけ」という言葉を取り上げ、「読者は「一つだけ」について語る両親の、それぞれのモノローグから、個の中に閉じ込められた「一つだけ」という言葉の意味を考えることになる。」と述べ、父が出征時に、ゆみ子に一輪のコスモスの花を渡した場面につい

て次のように書かれている。

ゆみ子のほしいものは「一つだけのおにぎり」であったのだが、「一つだけのお花」をもらったゆみ子は足をばたつかせて喜ぶ。なぜなら、ゆみ子が「一つだけ」と言って求めた願いはかなえられたからだ。ゆみ子がほしかったものは、空腹を満たす小さな喜びだけでなく、心を満たす小さな安らぎでもあったのだ。（ク）…（中略）…父親が最後にゆみ子に贈った言葉「一つだけのお花、大事にするんだよう……。」から、読者は、前段落の父親のモノローグ「喜びなんて、一つだってもらえないかもしれないんだね。」を振り返る。「一つだけの花」は「一つだけの喜び」として、目に見える形になり、父親の目に焼き付けられたのだ。（ケ）

また、母親の言う「一つだけ」については、次のように書かれている。

…唯一、自分の分をあげる時間は、母親自身にも安心の時間を作るのだ。現実に対峙する唯一の方法として、母親は安心の時間を作るのだ。「一つだけ」といってゆみ子に手わたすことは、実は小さな喜びを分けているのである。分けるのは小さな笑顔のもとである。それはゆみ子にとっても母親にとっても、飢えを超えて笑顔をもたらす安心の時間になるのだ。（コ）

さらに、「一つだけ」ではなく「一つ」を取り上げたものではあるが、作品中の同じ箇所に言及した論考として（c）三井喜美子「奇跡の花――願いの文学「一つの花」論」[8]がある。この中の「三　抑制の文体」には次のように書かれている[9]。

まず、一章において、「一つだけちょうだい。」という言葉を覚えたゆみ子が物語られている。この言葉は、戦争が激化する中で、物がなくなり、食べ物を求める極限状態から生まれた言葉であった。（サ）「一つ」は食べ物を意味するキー・ワードであった。が、二章においてその言葉に別の意味が込められていく。母親の、「一つだけちょうだいといえば、なんでももらえると思っているのね。」という嘆き。（シ）また、父親の、「よろこびなんて、一つだってもらえないかもしれないんだね。いったい、大きくなって、どんな子にそだつだろう。」という不安。（ス）幼い我が子に、「一つだけちょうだい」と手を差し出され、親は一体何をその手に握らせてあげたらいいのだろうか。そんな親の問い掛けが「一つ」に込められていく。そして、今生の別れの場面で父親が手渡したものが一輪のコスモスであった。それはふとした思い付きであったように作品には形象されている。偶然見つけた物に、父親は思いのすべてを込めるのであろう。「一つだけのお花、だいじにするんだよう……」と。この言葉に意味を見いだしていくのは、ほかならぬ読者の読みの作業なのだ。（セ）我が子への愛情、平和への志向、豊かさへのあこがれ、ゆみ子の幸せ、人間らしさの尊重、そうした様々な願いや祈りが読み取られることだろう。父親が手渡したものは、言うならば、希望である。（ソ）

これら三つの論考も参照しながら、以下の章で、物語に幾度も出てくる「一つだけ」という言葉が持つ多様な意味をそれぞれの場面において子細に読み取り考察していく。

３「一つだけ」の表す意味

「はじめに」で述べたように、『一つの花』に出てくる「一つだけ」について、誰が、どの場面、文脈で、何に対してどのような意味で使用し、それがどのように読み取れるのかを、以下に【1】ゆみ子、【2】お母さん、【3】お父さんに分けて見、考察していく。

【1】ゆみ子の「一つだけ」の意味

「ゆみ子」は『一つの花』の登場人物で、年齢は書かれていないが、前半の場面ではまだ言葉を覚えたばかりであるから、一歳から一歳半ぐらいと想像される。このゆみ子が最初にはっきり覚えた言葉が「一つだけちょうだい。」（１場面）である。「はっきり覚えた最初の言葉」と書かれているのは、言葉が表す意味を正確に理解して覚えたということであろう。「一つだけちょうだい。」といえば、お母さんは、そのほしいと言っているものを、一つだけくれたのである。ゆみ子が「一つだけちょうだい」と言っているのは、「ごはんのときでも、おやつのときでも」と書かれているように、食べ物に対してである。

この「一つだけ」の意味は、ゆみ子にとっては「（食べるものを）一つだけでいいから（ちょうだい。）」という許可、許容を求める限定である。もっともっと欲しいけれど、一つだけでいいから（ちょうだい。）ということである。そう読むと、先行研究（以後「先行研究」は省いて記号のみで示す）(a) の（イ）の「愛情の証」は良いとしても（ア）の「何でも欲しいものが手に入る魔法の言葉」というのは楽観的に過ぎるのではないかと思われる。この「一つだけ」は (c) の（サ）に書かれているように「食べ物を求める極限状態から生まれた言葉」なのである。ゆみ子が「一つだけちょうだい」という言葉を覚えることになったのは、それが、お母さんの口癖だったからである。戦争が激しく、食べるものはわずかで、もっともっとと欲しがるゆみ子に自分の分から取り分けて「一つだけよ」と言って与えるのが、口癖になるほど常のことになっていたのである。

【2】お母さんの「一つだけ」の意味

お母さんが「一つだけ」と言っているのも、食べ物に対してである。しかし、お母さんが言う「一つだけ」の意味は、【1】で述べた、ゆみ子の言う「一つだけ」の意味とは違っている。お母さんの言う「一つだけ」とは、わずかな中から一つを与える時の「これ一つだけしかあげられない」という許容の限界、あるいは、最後の一つを与える時の「もうこれ一つだけしかないのよ（これの他はもう無いのよ）」という数量零の限界を意味している。これは (a) の（ウ）「もうこれだけという限定を表す言葉。」と同じであり、（キ）の「限りなく無に近い有を示す、選択が叶わない、極限を示す言葉」である。

お母さんは、食べ物のないぎりぎりの状況の中で、ゆみ子を育てていた。その生活の中で、「おかあさん」でも「おとうさん」でも「まんま」でもなく、「一つだけちょうだい」という言葉

を最初に覚えたゆみ子を、どんなにか不憫に思っていたことだろう。そう考えると（a）の（エ）のように「「母としての痛み」の発露」と読むこともできる。その気持ちが言葉として表されているのが次の言葉である。

「なんてかわいそうな子でしょうね。一つだけちょうだいと言えば、なんでももらえると思っているのね。」（２場面）

これは（c）の（シ）に書かれているように「母親の嘆き」の言葉である。このお母さんの言葉から、ゆみ子が理解している（言っている）「一つだけ」の意味とお母さんの言う「一つだけ」の意味の違いがよくわかる。ゆみ子は、「一つだけちょうだい。」と言えばその度に一つもらえると思っているが、「一つだけちょうだい。」と言っても、なければもらえないのだということは理解していないのである。

（b）の（コ）には「「一つだけ」といって（自分の分から取り分けて）ゆみ子に手わたすこと」は「飢えを超えて小さな笑顔をもたらす安心の時間になる」と書かれている。しかし、「一つだけ」と言ってしかゆみ子に与えることができず、無ければそれすらできない現実の中で、「一つだけ（よ）」と言うことが笑顔をもたらす安心の時間になるとは言えないのではないだろうか。

【３】 お父さんの「一つだけ」の意味

前節のお母さんの言葉に続けて、お父さんの次の言葉がある。

「この子は、一生、みんなちょうだい、山ほどちょうだいと言って、両手を出すことを知らずにすごすかもしれないね。一つだけのいも、一つだけのにぎりめし、一つだけのかぼちゃのにつけ――。みんな一つだけ。一つだけのよろこびさ。いや、よろこびなんて、一つだってもらえないかもしれないんだね。いったい、おおきくなって、どんな子に育つだろう。」（２場面）

ここでお父さんが「一つだけ」と言っているのも、食べ物に対してである。お父さんは、「一つだけちょうだい」という言葉に対比させて、「みんなちょうだい」、「山ほどちょうだい」という言葉を取り上げている。そして、「みんなちょうだい」、「山ほどちょうだい」と違って「一つだけちょうだい」という言葉に表される、卑屈で萎縮した、伸び伸びできない、侘しい生活（おそらく戦争中の人々の生活がそうだったのであろう）を、生まれた時から送らざるを得ないゆみ子を不憫に思い、また、ゆみ子の将来を思い、卑屈な性格の大人になってしまうのではないかといった心配をして辛い気持ちになるのである。（c）の（ス）「父親の不安」というのも同じ気持ちである。お父さんの「おおきくなって、どんな子に育つだろう。」という言葉にはその気持が表れている。この時お父さんが言った「一つだけ」は「せめて一つだけでいいから、それ以上は求めないから」という許可、許容を求める限定の「一つだけ」であり、ゆみ子の言う「一つだけ」と意味は同じである。しかし、それを不憫に思った直後、さらに食べ物ではないもの「よろこび」についても考えを及ぼし、「よろこびなんて、一つだってもらえないかもしれない」と、そのせめての一つさえもらえないかもしれないゆみ子の将来を憂えるのである。（a）の（オ）「どうすることもできない、時代を背負ったやりきれない言葉」であると

言える。

そのお父さんが、戦争に行くことになった。（３場面）出発の日、用意していたおにぎりを、ゆみ子は駅へ行く道々で、「一つだけちょうだい、おじぎり、一つだけちょうだい。」と言って全部食べてしまった。そのあと、いよいよ汽車が入ってくるというときになって、また、ゆみ子の「一つだけちょうだい。」がはじまり、泣き出してしまった。そんなゆみ子に、お父さんは、「プラットホームのはしっぽの、ごみすて場のような所に、わすれられたようにさいていたコスモスの花」を、一輪折り取って持ってきて渡しながら言う。

「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう――。」

(b) の（ク）で、「ゆみ子が（「一つだけ」といって）ほしかったものは、空腹を満たす小さな喜びだけでなく、心を満たす小さな安らぎでもあったのだ。」と書かれ、（ケ）で「「一つだけの花」は「一つだけの喜び」として、目に見える形になり、父親の目に焼き付けられたのだ。」と書かれている。ここでの「一つだけ」は、ゆみ子の言う「一つだけ」（許可・許容を求める限定）の意味で読み取られている。これでは、おにぎりが「一つだけ」欲しいと言って泣くゆみ子のために、おにぎりではないが何かを「一つだけ」あげようとして見つけてきたコスモスの花にゆみ子が喜んだことを「一つだけ（の喜び）」と父が意味づけたということになってしまう。このような読み方も可能であろうが、コスモスの花に冠された「一つだけ」の意味をそのように（許可・許容を求める限定の意味で）読み取ってもよいのだろうか。

お父さんは、ゆみ子のために、一群のコスモスの花の中からその一輪（一つ）だけを折り取って（お父さんが見つけたコスモスに咲いていた花が一輪だけであったとしても、ゆみ子のために一輪折り取ったことには変わりがない）持ってきて、「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう――。」と言っているのである。このお父さんの言葉の「一つだけ」の意味は、これまで出てきた「一つだけ」とは、全く違う。これは、ゆみ子が「一つだけ。一つだけ。」と言った言葉に対して「一つだけあげよう。」と言っているのだが、ゆみ子の「一つだけでいいからちょうだい。」という許可、許容を求める限定の意味ではなく、唯一無二の、他にはないたった一つの、とても大切なものという意味での「一つだけ」である。父親が戦争に行く時に（もう二度と会えないかもしれない別れの時にあたって）、愛しい、大切なわが子に手渡す唯一のものという意味である。(a) の（カ）「世界に二つとない、父の思いをこめた言葉」というのはこれと同じ意味を読み取っていると言えるだろう。

この「一つだけ」にはマイナスの意味はない。むしろ、この一輪のコスモス、一つの花に冠された「一つだけ」には、父親がわが子に与える唯一無二のこの上なく大切な宝物という、高価な、肯定的で前向きな生き方を示すプラスの意味がこめられている。つまり、父のこの言葉によって、「一つだけ」のこれまで意味していたものが、マイナスからプラスへ180度転換させられ、昇華させられたのである。そして父親からわが子に与える唯一の宝物（これは、ごみすて場に忘れられた様にさいていたコスモスであったが美しいお花である。おにぎりは、食べ物であり、食べればなくなってしまう。大事にするんだよというのも美しい花であるからこそ言えたことであろう）であるから大切にするんだよと、「一つだけ」の指し示すものに計り知れなく高い価値を付加したと読み取れるのである。(c) の（セ）には「偶然見つけた物に、父親

は思いのすべてを込めるのであろう。」とあり、続けて「この言葉に意味を見いだしていくのは、ほかならぬ読者の読みの作業なのだ。」と書かれている。さらに（ソ）には「我が子への愛情、平和への志向、豊かさへのあこがれ、ゆみ子の幸せ、人間らしさの尊重」「希望」」と多くのものが読み取れるものとして挙げられている。私は、父の「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう――。」というこの言葉から、「一つだけの花」とは、戦地に向かいもう二度と会うことができないかもしれない父親から娘に贈る唯一の、他に代えることのできない大きな大きな愛情であると読み取る。

ゆみ子には、父親のそのような気持ちはわかるはずもないが、その花をもらってキャッキャッと足をばたつかせてよろんだ。それは、ゆみ子の覚えた卑屈で否定的な「一つだけ」ではない、肯定的な、唯一無二の高価な宝物である「一つだけ」の花が、ゆみ子に受け入れられたということである。「お父さんは、それを見てにっこり笑うと、何も言わずに、…」という箇所に父親の嬉しさが表現されている。ゆみ子が、父の最後の贈り物を喜んで受け入れたということは、ゆみ子が卑屈な子ではなく、また、腹を満たす食べ物だけではなく、美しい花にも心を動かし喜ぶ子であるということを示している。父親は、ゆみ子のにぎっている一つの花を見つめながら汽車に乗って行った。「お父さんが、最後に一つだけの大切なものを手渡してくれた」という記憶をゆみ子に残して、また、たった一つの宝物である一輪のコスモスを、最後に幼い娘に手渡したという記憶を持って父親は出征したのである。

4　主題に迫る

『今西祐行全集　第四巻』のあとがきには、『一つの花』について、さらに続けて次のように書かれている[10)]。

> そのころ私は荻窪駅に近い天沼の町裏で五畳というふしぎな部屋を借りて親子三人で暮らしていました。もう戦争が終っていく年もたっていましたが、貧しい私は戦争中と同じように、その日の糧にもこと欠くような乏しい暮らしをしていました。ある日そんな私を見かねて与田準一さんが訪ねてきてくださいました。――ぼくのところへこんな雑誌から依頼がきているが、代りに書いてみないか。原稿料は少ないだろうが、編集の人には話しておくから――とおっしゃるのです。こうして書かせていただいた作品でした。
>
> 私のひとり娘はちょうど作品の中のゆみ子と同じ年ごろでした。失業していましたので、毎日その子をつれて、散歩ばかりしていました。近くに青梅街道が中央線をまたぐ高い陸橋がありました。私は子どもをつれてよくそこにのぼりました。晴れた日には、そこから遠くに富士山や丹沢、秩父の山なみが見えました。“陸橋”は私の幼い日の記憶につながる“風景”でした。そんなある日私はふと思ったのです。――こんなに貧乏していても、もうこの子の頭の上に焼夷弾がおちてくることはないんだな。こんな子を残して戦争に行くことはないんだな――そう思うと、平和などということばではとても現わせない何か熱いものがこみあげてくるのでした。私はそれを書こうと思いました。

先に１章で「明日の命も定かでなく、物資が欠乏し食べるものもままならい戦時中と、その

十年後の何を食べるか選ぶことができるほどに物資もいきわたり、父はなくとも働きながら母子が暮らす平和な様子を対比させることによって、「反戦平和」を訴えている。」と書いた。平和であれば、父親が、母子を残して戦地に行くこともない。このような辛い別れもなかったわけである。この作品の底に流れる大きなテーマ（主題）は「反戦平和」である。

その戦争の時代に生を受け、成長していく娘ゆみ子の行く末を、父母は案じる。わずかな食べ物をもらうために、まだ赤ん坊であるゆみ子が「一つだけちょうだい」という言葉をまず覚え、それを繰り返し言うことに父母は心を痛める。その「一つだけ」という言葉に大きな価値を付加して、父親は、美しいコスモスの花をゆみ子に与える。この父親が与えた一輪のコスモスの花は、父親のわが子への大きな愛情を象徴している。戦後、ゆみ子と母はとんとんぶきの小さな家で暮らしているが、その家は、コスモスの花でいっぱいに包まれている（４場面）。父親が出征する最後の別れに際して、たった一つの大切なものであり、父親の愛情の象徴として手渡されたそのコスモスの花に包まれているのである。父親は、戦争から帰ることができなかったが、父の愛情の象徴であるコスモスの花に包まれて、つまり、父なき後も父の愛に包まれて、母子は暮らしているのである。勿論ここには母親の働きが大きく存在する。父親が出征する際に、一輪のコスモスが、父親の愛情の象徴としてゆみ子に手渡されたことを見、記憶している母親が家の周りにコスモスを植えたのである。そのコスモスは、年々種を落として芽を出し、母子に大切に育てられて十年後の今では家がコスモスの花でいっぱいに包まれているのである。

この作品の主題は反戦平和であり、それと同時に、戦地に赴く父親のわが子を思う深い愛情（やるせない思いもみなこの愛情に昇華される）と、父の記憶の象徴であるコスモスの花に包まれて強く生きていく母子の姿であると言ってよいだろう。

おわりに

以上、今西祐行の『一つの花』の中の「一つだけ」という言葉の多様な意味を深く読み取ることで作品の主題に迫るということを試みた。そして、作品中の一語である「一つだけ」という言葉を取り上げるだけでも、主題に迫る読みをすることができたと考える。

戦後十年に満たない時期に発表され、それ以後小学校の国語教科書に長らく取り上げられ、現在も光村図書、東京書籍他の4年生の教科書に掲載されている『一つの花』は、反戦平和の教材として授業化されてきている。そして、この作品は、授業の中で児童に読み継がれている。

現行の東京書籍四年生の国語教科書の指導書[11)]では、『一つの花』の〈教科書の解説〉欄で、父親の出征の場面での父の言葉と、父親の「…一つの花を見つめながら……。」という表現を取り上げた後、次のように書かれている。

> この二つの表現は、題名の意味を考えさせる際に特に重要な表現である。父親は万感の思いを込めて、ゆみ子に一輪のコスモスを手渡している。「一つだけ」の意味が、それまでのものとは違っていることに気づかせたい。（１）（※波線と記号は筆者による。）

そして、板書例として

・お父さんの手に一輪のコスモスの花
・「一つだけのお花、だいじにするんだよう」
　→お父さんの愛じょう
　　代わりのない、たった一つの大切なもの

と書かれている。

また現行の光村図書四年生の国語教科書の指導書[12)]には、『一つの花』の〈教材文の特徴〉欄で、「一つ」「一つだけ」という言葉が効果的で、読者に迫ってくるとしたうえで、次のように書かれている。

「一つだけ」という言葉の中にある、父母のゆみ子への愛情は、何にも代え難い。平和であれば「一つだけ」の言葉など必要ない。たった一輪のコスモスしか与えてやることができずに出征していく父の悲しさと、平和な世の中になり、コスモスの花に囲まれて「一つだけ」と言わなくなったであろう「ゆみ子」の今を比較しているように思われる。そこに作者は何かを問いかけているのではないだろうか。

そして、板書例には、「一つの花」という題名を付けた理由として、

○なぜ「一つの花」という題名を付けたのか。
　・お父さんがゆみ子にわたした最後のもの
　＝お父さんの愛情

と書かれている。

このように、これらの現行の国語教科書の指導書には『一つの花』の中での「一つだけ」という言葉の重要性や、この言葉の多様な意味を読み取ることの重要性（波線（１））は指摘されている。しかし、作品の異なる場面や文脈の中で「一つだけ」がどのような意味で使われどう読み取れるのか、また、それをどう授業化していくのかについては、詳しく書かれていない。それらは、個々の教師にまかされているのである。「はじめに」でも述べたように教材研究はその作品をどう読み取るかという深い作品研究に基づいてなされなければならない。そして、その作品研究も本文に忠実に分析的に行われなければならない。その作品で授業をしていく教師一人一人が、一つ一つの言葉のもつ多様な意味を正確に押さえ、各場面におけるその意味を深く読み取ることによって作品の主題に迫るという読み方をすることが求められるのである。

この研究ノートは、第1回　教育と表現を語る会（2022年2月26日（土）於ハルカス23階IBUサテライト教室）での発表と当日のご助言をもとに作成しました。発表に際しては貴重なご意見、ご助言をいただきましたことを感謝申し上げます。

【註】

1）『今西祐行全集　第四巻　一つの花』 今西祐行　1987年12月　偕成社。

2）注①掲載書258頁。

3）『一つの花』の文学的研究としては以下の論考があるが、いずれも、この作品が読者である児童に対してどのような価値、可能性があるかを論じており教材論的な観点を内に含んでいる。

〈1〉黒古一夫「『一つの花』試論――反戦平和童話の可能性」（『文学の力×教材の力　小学校編4年』田中実・須貝千里　編　2001年３月　教育出版　所収）

〈2〉村上呂里「娘が読む「父親の物語」――今西祐行『一つの花』」（『文学の力×教材の力　小学校編4年』田中実・須貝千里　編　2001年３月　教育出版　所収）

〈3〉助川幸逸郎「「父」のいない楽土――寓話として『一つの花』を読む」（『文学が教育にできること――「読むこと」の秘鑰〈ひやく〉――』田中実・須貝千里　編　2012年3月　教育出版所収）

〈1〉〈2〉に共通するのは『一つの花』の反戦平和童話としての批判である。さらに〈2〉では女性の視点からの声が聞こえないとの批判もある。また、〈3〉では『一つの花』をリアリズム文学ではなく寓話（ゆみ子によって、「もの」への渇望を「もの」だけによって癒すことはできないということを父親が教えられた）であると読み解くことで〈1〉の反戦平和童話となり得ていないとの批判を退けている。

4）『一つの花　評伝今西祐行』関口安義　2004年3月　教育出版。

5）注④掲載書114頁。

6）北村好史･生野金三「教材「一つの花」の研究（その1）――実践的指導力の体得を志向して――」（『白鷗大学論集』第23巻第2号　2009年3月）。

7）『文学の教材研究 〈読み〉のおもしろさを掘り起こす』田近洵一　他　ことばと教育の会　編　2014年3月　教育出版　所収。

8）『今西祐行全集別巻　今西祐行研究』三井喜美子　編　1998年５月　偕成社　所収。

9）注⑧掲載書106頁。

10）注①掲載書258―259頁。

11）『新しい国語　四上　教師用指導書　研究編』2020年　東京書籍。

12）『小学校国語　学習指導書　4上　かがやき』2020年　光村図書出版。